

編 集 後 記

鹿児島大学医学部は1993年創立50周年の節目を迎えた。50周年記念の式典が行われ、現在同窓生を中心に広く浄財を集めて、同窓会館の建設が始まっている。

これに1年遅れて1994年は鹿児島大学医学部とも大変ゆかりのある。否、切っても切れない関係にあるウィリアム・ウィリス先生の没後100年目を迎えた。先生の没後100年を迎えるにあたって鹿児島大学医学部としては4つのプロジェクトを計画した。先生の命日における記念式典、先生の遺徳を偲んでの講演会、先生の亡骸の眠っておられる地への墓参団の派遣及び記念誌の発行の4つである。

このうち、命日の記念式典は2月14日に桜ヶ丘のウィリス先生の遺徳碑前に大学関係者、同窓会関係者を中心にして集まり簡素な中にも厳粛な式典を催して先生の遺徳を偲んだ。4月9日には偶々来日の都合について元駐日英国大使のヒュー・コータッチ卿をお迎えして卿と森重孝先生を講師に県医師会館に於いて記念講演会を開催した。コータッチ卿は「近代日本に於ける西洋医学の偉大な貢献者—英医ウィリアム・ウィリス」と題して、森重孝先生は「ウィリアム・ウィリスの門下生たち」と題して講演された。大学関係者、同窓会関係者、学生、関係学校の学生達、一般聴衆で会場は立錫の余地もないほどの人で溢れ、記念講演会としては大成功であった。ついで、9月には医学部教官、同窓会関係者、鹿児島日英協会を中心に墓参団が組織され、ウィリスの故郷を訪問し市、市長はじめ関係者の暖かい歓迎を受けた。

ウィリス関係の最後の企画として、たくさんの人たちの寄稿を頂いて、ウィリス没後100年の記念号を季刊の鹿児島大学医学雑誌の特別号として出版する事になり、我々三人が編集を担当する事になった。編集者としてはまずもって、大変お忙しい中、御寄稿下さった著者の皆様に心から御礼を申しあげたい。本特別号の編集の基本方針は簡単に二つである。一つは時代の流れを考えて、ウィリスを鹿児島、九州、日本の人たちに知って頂くだけでなく、広く海外の人たちにもこの際ウィリスの事を知って頂くよう努力するという事であった。もう一つは、鹿児島大学医学雑誌の学術雑誌としての性質を大切にすると云う事であった。前者の目的達成のために、寄稿者の何人かには英文での御寄稿をお願いしたが、これは大変難しい問題で計画通りには実現しなかった。後者の方針を踏襲するためには寄稿論文に科学論文としての一つの思想、史観のようなものが備わっている事が望ましいと考えた。さらになんらかの新しい事実の発見、厳粛な客観性を持った事実の記載等が要求されるとも編集者は考えた。御寄稿頂いた論文の中には今までに報告のない新しい事実をたくさん含んだ論文がいくつか見られる。しかし、二つの目的達成のため、この方面の論文として代表的な論文の再掲載もあえて行わざるを得なかった。私たち編集者はその再掲載を取って行った。これはウィリスをより身近な人物として知って欲しいという編集者の気持ちの現れであると理解していただきたい。寄稿頂いた方々の他にも、萩原延寿先生、蒲原宏先生、駐タイ英国大使館パンチバ・シャンソーン氏のように今回の企画に御理解を示され、御協力を頂いた方々がたくさんおられる。これらの方々にも厚く御礼申し上げたい。

ウィリスの日本に於ける業績については、かなり研究がすすんで完成の域に近づいていると云えるが、晩年のタイ国に於ける業績は殆どつまびらかでない。この方面の発掘の努力も行ったが、今回結実してまとまったものとして報告できる資料が出来なかったことを大変残念に思っております。いつの日かこの方面の新しい資料が読者の目に止まる事を祈念しております。最後にコータッチ卿におかれては、外交官として長年日英友好のために尽力された功績に対し、1995年4月29日日本国政府より勲一等瑞宝章が叙勲された事を付記する。

村 田 長 芳
吉 田 浩 己
田 中 信 行